

日本文学関係貴重書展示 梶井基次郎とその時代

解説資料

特別展の開催にあたって

梶井基次郎(一九〇一―一九三二)は若くしてこの世を去り、発表した作品も決して多くはない。しかし彼の作品は、日本の近現代文学に鮮やかな足跡を残し、今日に至るまで数多くの読者を獲得し続けている。なかでも、短篇小説「檸檬」(一九二五)は、長きにわたって教科書教材にも用いられており、幅広い世代に親しまれてきた。今回の特別展では、彼の代表作でもある小説「檸檬」の成立過程が窺える自筆原稿類(「秘やかな楽しみ」等)や作品タイトルに言及した書簡(淀野隆三宛書簡)のほか、戯曲や習作等の草稿を展示する。また併せて、梶井と同時代に活躍していた作家たちの当時の自筆原稿や単行本を取り上げる。

梶井が創作活動を本格化させる一九二〇年代から三〇年代は、社会と芸術文化のありようが様々な観点から問い直され、新しい表現活動が創作ジャンルをまたいで競い合うように生まれていく時代でもあった。関東大震災(一九二三)を挟むこの時期は、都市産業構造の変化や出版市場の活性化を背景に、プロレタリア文学やモダニズム文学が隆盛するほか、詩歌、大衆文学、評論、演劇などが多様な展開を遂げる。ここに出展したのは、その中で新たな表現を切り拓いていった書き手たちの著作である。趣向を凝らした装丁の単行本や、一字一句の表現に推敲を重ねた原稿には、そうした時代の息吹きも感じ取ることができる。

(企画) 大妻女子大学文学部 教授 木戸雄一
准教授 井原あや
准教授 塩野加織
(協力) 大妻女子大学名誉教授 杉浦静

1 「秘やかな楽しみ」草稿

梶井基次郎
縦十六・九cm 横二〇・六cm
大妻女子大学図書館
筑摩書房旧版全集第一巻(『梶井基次郎全集』
一九五九〔昭和三四〕年)に「習作」として収録された。梶井の代表作といわれる「檸檬」(『青空』

一九二五〔大正十四〕年一月)のモチーフとなるものがここに見られる。ノート片に書かれている。

2 「淀野隆三宛書簡」

梶井基次郎
封筒縦二〇・〇cm 横八・三cm
縦二一・〇cm 横十六・七cm
大妻女子大学図書館
便箋(MARUZEN)
一九三一(昭和六)年二月十四日付。兵庫県川辺郡稲野村字千僧より。なお、展示箇所は母の代筆。

3 「小さき良心」草稿①

梶井基次郎
縦二一・五cm 横二四・四cm
大妻女子大学図書館
淀野隆三によって、「習作」(一九二二〔大正十一〕年作)として筑摩書房旧版全集第一巻(『梶井基次郎全集』一九五九〔昭和三四〕年)に収録。

淀野隆三は同人誌『青空』に参加した人物で、中谷孝雄とともに『梶井基次郎全集』(六峰書房、一九三四〔昭和九〕年)や『梶井基次郎全集』(筑摩書房、一九六六〔昭和四一〕年)などの編纂を行ったほか、マルセル・プルーストやアンドレ・ジイド、シャルル・ルイ・フィリップなどフランス文学を翻訳した。

4 「小さき良心」草稿②

梶井基次郎
四〇〇字詰原稿用紙
縦二一・五cm 横二四・四cm
大妻女子大学図書館

「小さき良心」①の続き。全十三枚。削除、インクによる書込みのほか、色鉛筆による書込みが行われており、作品の完成への過程が見てとれる。

5 「大蒜」草稿①

梶井基次郎
四〇〇字詰原稿用紙
縦二三・四cm 横二二・八cm
大妻女子大学図書館
筑摩書房旧版全集第一巻(『梶井基次郎全集』一九五九〔昭和三四〕年)「習作」の部に収録された一枚目。

6 「大蒜」草稿②

縦二〇〇字 梶井基次郎
四〇〇字 詰原稿用紙
縦二三・四cm 横二三・八cm
大妻女子大学図書館

「大蒜」①での加除を浄書し、欄外に書込み。

7 「大蒜」草稿③

縦二〇〇字 梶井基次郎
四〇〇字 詰原稿用紙
縦二三・四cm 横二三・二cm
大妻女子大学図書館

「大蒜」の書き出し部分の下書き。署名の「瀨山 極」とは梶井が用いたペンネームで、ポール・セザンヌをもじったもの(筑摩書房旧版全集第一巻「編者註」『「梶井基次郎全集」一九五九(昭和三四)年』)。ペンネームが書込まれ、作品化への強い意志が伝わってくる。

※ポール・セザンヌ…一八三九—一九〇六。フランスの画家。

8 「水滸伝」草稿①

縦二〇〇字 梶井基次郎
四〇〇字 詰原稿用紙
縦二三・三cm 横二三・八cm
大妻女子大学図書館

筑摩書房旧版全集(『梶井基次郎全集』一九五九〔昭和三四〕年)では、一九三三(大正十二)年作とされ、第二巻日記草稿第三帖の終りに編入された「大蒜」のプロット。

9 「水滸伝」全集稿本1

縦二〇〇字 梶井基次郎
二〇〇字 詰原稿用紙
縦二六・四cm 横一九・二cm
大妻女子大学図書館

「水滸伝」草稿(展示番号8)への加筆を、全集作成時別人により浄書。

10 「水滸伝」全集稿本2

縦二〇〇字 梶井基次郎
二〇〇字 詰原稿用紙
縦二六・四cm 横一九・二cm
大妻女子大学図書館

「水滸伝」全集稿本1(展示番号9)の続き。

11 「母親」草稿

縦二〇〇字 梶井基次郎
四〇〇字 詰原稿用紙
縦二二・三cm 横三三・五cm

大妻女子大学図書館

筑摩書房旧版全集第一巻(『梶井基次郎全集』一九五九〔昭和三四〕年)「習作」の部に、一九三三(大正十二)年作として収録。

12 「河岸」草稿①

縦一六・五cm 横二二・〇cm
大妻女子大学図書館

筑摩書房旧版全集第一巻(『梶井基次郎全集』一九五九〔昭和三四〕年)「習作」の部に収録。ノート片(縦一六・八cm 横二二・二cm)に書かれている。

13 「河岸」草稿②

縦一六・五cm 横二二・〇cm
大妻女子大学図書館

「河岸」草稿①の裏に書かれた草稿。

14 「河岸」草稿③

縦一六・二cm 横二二・〇cm
大妻女子大学図書館

「河岸」②を浄書したもの。「河岸」①②とは異なるノートブック片に書かれている

15 「淀野隆三宛書簡」

封筒縦二一・六cm 横八・四cm
便箋(四〇〇字 詰原稿用紙)
縦二五・五cm 横三五・六cm
大妻女子大学図書館

一九二七(昭和二)年三月八日付。伊豆湯ヶ島温泉世古の瀧 湯川屋内より。

16 「汽車その他——瀨山の話」草稿

縦二〇〇字 梶井基次郎
二〇〇字 詰原稿用紙
縦二五・二cm 横一七・三cm
大妻女子大学図書館

執筆時期は、筑摩書房旧版全集第一巻(『梶井基次郎全集』一九五九〔昭和三四〕年)によれば、一九二五(大正十四)年。表題からは、習作「瀨山の話」(一九二四〔大正十三〕年)の一部分として構想されたと考えられるが、「瀨山の話」には見えない。しかし、「瀨山の話」の草稿(「日記草稿第三帖」)には、この場面も見えることから、草稿から「瀨山の話」へまとめられ行く過程で削られ、のちに違った作品として書かれたものか。

17 「太郎と街」草稿

梶井基次郎
四〇〇字詰原稿用紙
縦二四・四cm横十五・二cm
大妻女子大学図書館

脱稿日付と思われる「大正甲子拾月四日」は、一九二四(大正十三)年十月四日。梶井基次郎の生前には発表されることなく、遺稿として雑誌『セルパン』(一九三三「昭和八」年五月)に発表された。作品中の一文、「洋酒瓶の並んだ棚はバクダツトの祭の様だ。」は、後の作品「泥濘」(『青空』一九二五年「大正十四」年七月)におけるカフェー「ライオン」での場面、「お前達は並んでアラビア兵のやうだ」「そや、バクダツトの祭のやうだ」に通うか。

18 「椽の花」草稿

梶井基次郎
縦二五・二cm横十七・五cm
大妻女子大学図書館

『青空』一九二五(大正十四)年十一月号に発表された作品の第二章までの原稿。全体に渡って加筆訂正された様子がみえるが、発表作品に至るまでには、この原稿からもう一段階の加筆訂正が行われている。なお、筑摩書房旧版全集第一巻(『梶井基次郎全集』一九五九「昭和三四」年)の「編者註」によれば、「原稿は散逸、草稿が残つてゐる」とあるが、ここに展示したものは、その残つてゐる草稿の前半部に当たるもの。

19 「夕焼雲」草稿

梶井基次郎
四〇〇字詰原稿用紙
縦二四・〇cm横三二・七cm
大妻女子大学図書館

執筆時期は、筑摩書房旧版全集第二巻(『梶井基次郎全集』一九五九「昭和三四」年)によれば、一九二八(昭和三)年。仮題の「夕焼雲」は、原稿の末尾、「夕焼雲に転身してしまひ度い願」による。内容は、梶井基次郎が療養していた伊豆湯ヶ島温泉でのことか。梶井基次郎は、一九二六(昭和元)年の年末から一九二八(昭和三)年の五月上旬まで、湯ヶ島温泉に逗留、療養に努めた。

20 「奇妙な手品師」草稿

梶井基次郎
四〇〇字詰原稿用紙

縦二五・六cm横三五・一cm
大妻女子大学図書館

執筆時期は、筑摩書房旧版全集第二巻(『梶井基次郎全集』一九五九「昭和三四」年)によれば、一九二八(昭和三)年五月、湯ヶ島から上京した時のもの。この上京は、「戦闘的なプロレタリアやレンペンプロレタリアの近くに住み、生きた現代の断面を見て、勉強したいという希望からであった(一九二八「昭和三」年五月二十日付近藤直人宛書簡『梶井基次郎全集』第三巻、筑摩書房、一九五九「昭和三四」年)。しかし、「歩くど疲れるので悪道路を憎む」と原稿にもあるように、梶井基次郎の病は回復していなかった。

21 「わがひとに与ふる哀歌」草稿

伊東静雄
縦二四・〇cm横十七・五cm
大妻女子大学図書館

『わがひとに与ふる哀歌』は、一九三五(昭和十)年十月、コギト発行所から刊行された詩集。限定三百部。一九三六(昭和十一)年三月第二回文芸汎論賞を受賞。「人に与ふる」歌という形式を取ったのは、ヘルダーリンの書簡体韻文小説『ヒュペーリオン』の形式に倣ったもの。内容的にもその影響は著しく、日本ではじめて格調高い、ドイツの詩曲風の思想的作品を創出した。直接に朔太郎の〈郷土望景詩〉や『氷島』の意志的挫折の悲歌の系列に立っている。朔太郎も「真の本質的な抒情詩人」(『わがひとに与ふる哀歌』「コギト」一九三六(昭和十一)年一月であるとして、この詩集を絶賛している。

22 「わがひとに与ふる哀歌」草稿、校正刷り

伊東静雄
草稿縦二五・〇cm横三五・〇cm
校正刷り縦二一・〇cm横三八・〇cm
大妻女子大学図書館

一九三五(昭和十)年十月、コギト発行所から刊行された詩集『わがひとに与ふる哀歌』の原稿と校正刷り。推敲過程や詩の上部に付けられた記号の意味など、これからの研究が期待される。詩集の生成過程を探る上で大変に貴重な資料である。

23 「わがひとに与ふる哀歌」校正刷り

伊東静雄
縦三三・〇cm横二四・〇cm
大妻女子大学図書館

(参考) 『わがひとに与ふる哀歌』(複製)

伊東静雄 一九八三(昭和五八)年
日本近代文学館
原資料…一九三五(昭和十)年
大妻女子大学図書館

24 「病院の患者の歌」草稿

伊東静雄 四〇〇字詰原稿用紙(大阪府立住吉中学校用)二枚
縦二五・五cm横三五・〇cm
大妻女子大学草稿・テキスト研究所

筆記具はブルーブラックインク・ペン。「病院の患者の歌」は、詩集『わがひとに与ふる哀歌』(一九三五(昭和十)年、コギト発行所)収録。初出は、伊東参加の同人誌『呂』一九三三(昭和八年六月号。同年八月刊の『コギト』に再掲されている。同年の三月頃、『呂』に発表された伊東の詩に注目した田中克己が、『コギト』の中心人物であった保田与重郎に伊東の存在を知らせたことがきっかけとなって、伊東と『コギト』との関係が始まった。『病院の患者の歌』は、伊東の『コギト』登場の最初の作品。本篇は、『コギト』掲載の草稿。右端のコは印刷所の記入か。右半に「本文5号」「1頁」「6行分」「9ポ」などの消し跡があり、『コギト』入稿時の指定であることがわかる。

25 『花物語』第一―三集

吉屋信子 一九二九(大正九)年―一九二二(大正十)年
洛陽堂 縦十五・二cm横十一・一cm
大妻女子大学図書館

吉屋信子による少女小説の代表作。『花物語』は一九一六年七月に雑誌『少女画報』に掲載された「鈴蘭」に始まり、『少女倶楽部』でも書き継がれた短編小説群で、題名には「鈴蘭」や「月見草」など花の名が付けられている。第一集には「鈴蘭」から「雛芥子」まで二十篇、第二集には「百合」から「燃ゆる花」まで十篇、第三集には「釣鐘草」から「浜撫子」まで七篇が収録。執筆時期による違いはあるものの、少女同士あるいは年上の女性への憧れや思慕、別れが優美な筆致で描かれている一方、抑圧的な社会に苦しむ少女の姿も描かれている。

26 『花物語』第一・二・四・五巻

吉屋信子 一九二四(大正十三)年―一九二六(大正十四)年
交蘭社 縦十九・二cm横十二・八cm
大妻女子大学図書館

洛陽堂版(一九二〇(大正九)年一九二二(大正十)年)の後に刊行。挿画は当時女性雑誌や少女雑誌で活躍していた画家で詩人でもある落谷虹児と須藤しげる(須藤重)が担当した。そのため、巻によって扉絵の印象が異なる(扉絵は各巻に収録された最初の物語の題名にちなんでおり、第一巻の扉絵は落谷虹児による鈴蘭、第五巻の扉絵は須藤しげるによるスイートピーが描かれている)。この交蘭社版『花物語』には、洛陽堂版『花物語』刊行後に発表された小説も収められている。

27 『花のワルツ』

川端康成 一九三三(昭和八)年
改造社 縦二〇・八cm横十六・〇cm
大妻女子大学図書館

一九三三(昭和八)年から一九三七(昭和十二)年に発表された小説五篇を収録。収録作のうち「虹」と「花のワルツ」は、川端が他作品にも取り入れていた(舞踊)と若い女性を描いたもの。「虹」では浅草の踊子を描き、表題作「花のワルツ」では鈴子と星枝と二人の師である竹内、彼の弟子・南条の人間関係とバレエに向き合い葛藤する姿を描いている。「花のワルツ」という題名は、鈴子と星枝が踊るチャイコフスキーのバレエ「くるみ割り人形」の「花のワルツ」に由来する。この本に収められた「花のワルツ」の末尾は川端による書き下ろしであるが、未完に終わった。

28 『機械』

横光利一 一九三二(昭和六)年
白水社 縦二二・七cm横十六・〇cm
大妻女子大学図書館

佐野繁次郎装幀。ネームプレート工場を舞台に、四人の心理が機械のように連動しつつ葛藤するモダニズムの実験的小説。当時佐野は二科会でモダ

ニズムの画家として活躍を始めていた。本体の装幀は一九三二(昭和六)年の二科展「牛賞受賞作」『休日』のモチーフをより図案化したもの。函の図案は一九三〇(昭和五)年『二科画集』掲載の「コムポジション」と同じモチーフである。

29 『時計』

横光利一
一九三四(昭和九)年
創元社 函入

佐野繁次郎装幀。黒く染めた粗目の木綿にアルミ板の矩形を縫い付けたモダンニズム装幀の代表作。当時佐野はトタン、アルミ、ガラスなどの額縁を多用しており、金属などの物質感へのこだわりを見せていた。また白い布貼りに赤題簽という函の意匠には、「白とか鼠とか云ふ所へちよつと赤いのが入つて、それで赤が利くのです」(『近代生活』一九三〇〔昭和五〕年)という佐野の嗜好が生かされている。

30 『春と修羅』

宮沢賢治
一九二四(昭和十三)年
関根書店
縦二〇・〇cm 横一二・七cm
大妻女子大学図書館

函の表には、左横書きで、「春と修羅／心象スケッチ／宮沢賢治」と書かれ、本扉には、縦書きで「心象スケッチ／春と修羅／大正十一、二年」とある。宮沢賢治の生前唯一の心象スケッチ集(詩集)。心象スケッチ六九篇及び「一九二四、一、二〇」の日付の「序」からなる。全八章で配列は日付順。緊密な構成意識により編集されている。表題作「春と修羅」、八百行を超える「小岩井農場」、妹の死と祈りの「永訣の朝」、妹の行方の探求と鎮魂の「青森挽歌」「オホーツク挽歌」などが収められる。

(参考) 『春と修羅』

宮沢賢治
一九二四(昭和十三)年
関根書店
大妻女子大学名誉教授 杉浦静先生所蔵

31 『グスコーブドリの伝記』

宮沢賢治
一九四二(昭和十六)年
羽田書店

函入 菊判並装
縦二一・五cm 横一六・〇cm
大妻女子大学図書館

挿絵・装幀、解説は、横井弘三。『宮沢賢治名作選』(一九三九〔昭和十四〕年三月)、『風の又三郎』(一九三九〔昭和十四〕年十二月)に続く羽田書店刊の宮沢賢治童話集。収録作品は、詩「雨ニモマケズ」、童話「北守將軍と三人兄弟の医者」「祭の晩」「ざしき童子の話」「よだかの星」「注文の多い料理店」「鳥の北斗七星」「雁の童子」「グスコーブドリの伝記」。扉に賢治詩碑の絵があり、碑面には高村光太郎の揮毫した「雨ニモマケズ」の後半部が書かれている。

32 『自筆本蘆刈』

谷崎潤一郎
一九三三(昭和八)年
創元社 函入
縦十四・〇cm 横二二・〇cm
大妻女子大学草稿・テキスト研究所

著者自装。『盲目物語』(一九三二〔昭和七〕年)以降、谷崎は和本の利点を生かした横長本という独自の装幀観を自装本によって試みており、本書はその三冊目。著者自筆の浄書本文を特漉の雁皮紙にオフセットで印刷した本文を袋綴じにし、鼠色の古代採紙に吉野紙の題簽を貼付した表紙を付し、桐材の挟板を付け函に入れた五百部限定定価十円の豪華本。北野恒富の口絵と挿画六葉を持つ。函に添付された別紙(展示品は欠)には、著者自ら印刷所で墨色の調整などを厳格に監督した旨が記されていた。また「著者の希望により、御買上の後は必ず此の紙函をお棄て下さい」ともあり、谷崎が望んだこの書物本来の姿は本体のみにあつたことがわかる。

33 『春琴抄』

谷崎潤一郎
一九三三(昭和八)年
創元社 函入
縦十九・〇cm 横十三・〇cm
大妻女子大学図書館

著者自装。帙は未晒しボール紙。本体は黒漆塗り表紙に金泥で「春琴抄」の表紙題をあしらう。表紙の意匠はやけどを負い醜く変貌した春琴を見ないために自らの目を潰した佐助の闇の視界と、その中でますます美しさを増す春琴の幻影を象っていると考えられる。本文には変体仮名活字と罫

線を使用するが、佐助が明治初期に著したという「春琴伝」に擬し、明治期に多用された罫紙と変体仮名交じりの書体になぞらえたものか。黒い表紙を開けると真紅の色刷り扉が現れるが、これは盲目の奥に燃える佐吉の情欲を表現しているともとれる。後年、老いらくの恋を描いた棟方志功装幀の『鍵』（一九五六〔昭和二二〕年）においても、函の黒い図案から表紙、見返し、扉に進むにつれて赤色の官能的な図案に変化していく趣向を用いている。なお、少数の知己にのみ配布した特装本は、表紙を赤漆塗にしている。本書は谷崎の自装本の中でも特に知られたものだが破損しやすく、装幀家の寿岳文章は書物の機能面を考慮せず意匠にのみ偏向した失敗作として厳しく批判した。

34 「鉄集」草稿

室生犀星
二〇〇字詰原稿用紙
縦二五・〇cm横十八・〇cm
大妻女子大学図書館

ペン書き。室生犀星には、一九三二（昭和七）年九月刊の詩集『鐵集』（椎の木社）があるが、本草稿本は題簽に「同名異集」とあるように、それとは異なるものである。本草稿は、「詩神」五巻二号（一九二九〔昭和四〕年二月）に発表され、後に、改造文庫版『室生犀星詩集』（一九二九〔昭和四〕年十一月）に収録された。草稿上の赤インクによる活字等の指定は、「詩神」発表時のものと思われる。

35 「復讐としての文学」草稿

萩原朔太郎
四〇〇字詰原稿用紙
縦二七・〇cm横三九・〇cm
大妻女子大学図書館

ペン書き。一九三六（昭和十一）年七月号の「コギト」に発表され、のち一九三七（昭和十二）年九月白水社刊の『無からの抗争』に収められたエッセイの原稿。『萩原朔太郎全集』の後記（筑摩書房）では、所在不明とされているもの。

36 『猫町』

萩原朔太郎
一九三五（昭和十）年
版画
縦十九・五cm横十五・三cm
大妻女子大学図書館

装幀川上澄生。「猫町」は、萩原朔太郎による短

篇小説で、本文の内題には「散文詩風な小説」と添書きがある。作中では、温泉に逗留していた詩人の「私」が見知らぬ町で目にした異様な光景——「猫、猫、猫、猫、猫、猫、猫、猫。どこを見ても猫ばかりだ」——が、「私」の視点を通して描かれる。版元の版画荘は、東京銀座で創作版画画廊として出発した出版社。

37 『定本青猫』

萩原朔太郎
一九三六（昭和十一）年
版画
函入
縦二〇・〇cm横十四・〇cm
大妻女子大学図書館

『青猫』というタイトルの詩集は、既に一九二三〔大正十二〕年に新潮社から出版されていたが、こちらの『定本青猫』は、既刊『青猫』の誤植等を修訂した上で、さらに新たな詩を複数加え、自序等も追加した新編詩集である。全六九の詩に加え、明治期の万国名所図会（展示番号42）から採録した六本の銅版画や、本書の小口側に刷り込まれた地紋など造本にも趣向を凝らしており、同書をもって『青猫』決定版にしたいという著者の思い入れの強さがうかがえる。

（参考） 世界旅行万国名所図絵（増補版）

青木恒三郎編
一八八九（明治二二）年
嵩山堂
大妻女子大学図書館

世界各地の風景を図版にした世界地誌。活版印刷が同一版面に文字と図像を印刷することが難しかったのに対し、この図絵でも使われている銅板は整版同様に同一版面に文字と図像を容易に彫り込めるため、絵入り本では比較的長く使われた。

38 『櫻貝』

吉屋信子
一九三五（昭和十）年
実業之日本社
縦十八・八cm横十三・二cm
大妻女子大学図書館

吉屋信子による少女小説。装幀と口絵は、当時、雑誌『少女の友』の表紙・挿絵・付録を担当していた人気画家・中原淳一。この本が刊行された一九三五（昭和十）年、吉屋は全集（『吉屋信子全集』全一二巻、新潮社、一九三五〔昭和十〕年

一九三六(昭和十一年)の刊行を開始しており、人気作家としての地位を確立していた。「櫻貝」は県知事の娘で女学校に通う瀬木藍子と彼女の同級生で互いに惹かれ合いながらも学校を去った江島薫、藍子の従妹・梢という三人の少女に降りかかる悲劇とめぐり逢いを描いたもの。本作は戦後も多くの読者に支持され、版を重ねた。

39『聖家族』

堀辰雄
一九三六(昭和十一年)年
野田書房
縦十七・五cm 横十二・〇cm
大妻女子大学図書館

本書に収録された三作——「聖家族」・「ルウベンスの偽画」・「快復期」——は、いずれも堀が新進作家として頭角をあらわすようになった時期の作品。なかでも表題作「聖家族」は、「死があたかも一つの季節を開いたかのやうだった。」という一文で始まり、登場人物の心理を微細に描き出す手法が評価され、堀の文壇出世作となった。

40『風立ちぬ』

堀辰雄
一九三七(昭和十二年)年
新潮社
縦十九・五cm 横十四・〇cm
大妻女子大学図書館

装幀鈴木信太郎。「風立ちぬ」は堀辰雄の代表作の一つで、主人公の「私」が婚約者「節子」の付き添いとして結核療養所で暮らす日々を、彼女の死とともに描いている。本書は、それまでに発表された作品「風立ちぬ」(『改造』一九三六(昭和十一年)十一月)、「冬」(『文藝春秋』一九三七(昭和十二年)一月)、「婚約」(『新女苑』一九三七(昭和十二年)四月)、「死のかげの谷」(『新潮』一九三八(昭和十三年)三月)をひとつにまとめたものであり、これをもって長編小説「風立ちぬ」が成立したといえる。

作家情報 (五十音順)

伊東静雄

一九〇六(明治三九年) — 一九五三(昭和二八年)

日本浪漫派の同人であり、その機関誌『日本浪漫派』や詩誌『コギト』などにも多く寄稿した。詩集『わがひとに与ふる哀歌』(一九三五(昭和十)、『夏花』(一九四一(昭和十五))、『反響』(一九四七

(昭和二二年)など。

梶井基次郎

一九〇一(明治三二年) — 一九三二(昭和七年)

一九二五(大正一四年)年一月に中谷孝雄・外村繁らと同人雑誌『青空』を創刊し、「檸檬」「城のある町にて」「泥濘」「路上」「椽の花」「Kの昇天」などを発表。『檸檬』(一九三一(昭和六年))など。

川端康成

一八九九(明治三二年) — 一九七二(昭和四七年)

横光利一らとともに雑誌『文芸時代』を創刊、新感覚派として知られる。『伊豆の踊子』(一九二七(昭和二年))、『浅草紅団』(一九三〇(昭和五年))、『雪国』(一九三七(昭和十二年))、『古都』(一九六二(昭和三七))など。一九六七(昭和四二年)年にノーベル文学賞を受賞。

谷崎潤一郎

一八八六(明治十九年) — 一九六五(昭和四〇年)

小説家。『刺青』(一九一〇(明治四三年))で唯美主義の作家として評価されるようになる。『痴人の愛』(一九二五(大正十四年))、『蓼食ふ虫』(一九二九(昭和五年))、『春琴抄』(一九三三(昭和八))、『細雪』(一九四六(昭和二一年)) — 一九四八(昭和二三))など。

萩原朔太郎

一八八六(明治十九年) — 一九四二(昭和一七年)

『月に吠える』(一九一七(大正六年))で詩壇の注目を集め、音楽性に富む口語自由詩の創作のほか評論活動も精力的に行った。他に『青猫』(一九二三(大正十二年))、『純情小曲集』(一九二五(大正十四))、『氷島』(一九三四(昭和九年))など。

堀辰雄

一九〇四(明治三七年) — 一九五三(昭和二八年)

フランス文学に通じ、新心理主義の手法を取り入れた創作を発表するほか、三好達治らとともに詩誌『四季』を主宰した。『聖家族』(一九三〇(昭和五))、『美しい村』(一九三四(昭和九年))、『菜穂子』(一九四一(昭和十六))など。

宮沢賢治

一八九六(明治二九年) — 一九三三(昭和八年)

農学校教師や農村の指導者として活動した一方

で、冷害に苦しむ東北地方の農村を題材にした童話や詩を執筆した。『春と修羅』（一九二四〔大正十三〕）、『注文の多い料理店』（一九二四〔大正十三〕）、『グスコープドリの伝記』（一九四一〔昭和十六〕）など。

室生犀星

一八八九（明治二二）―一九六二（昭和三七）

詩人、小説家。『抒情小曲集』（一九一八〔大正七〕）などの抒情詩人として出発し、『性に眼覚める頃』（一九二〇〔大正九〕）などの抒情的な作風の小説によって小説家としての地歩を築く。『あにいも』と『一九三四（昭和九）』、『杏つ子』（一九五七〔昭和三二〕）、『蜜のあはれ』（一九五九〔昭和三四〕）など。

横光利一

一八九八（明治三一）―一九四七（昭和二二）

小説家。『日輪』（一九二三〔大正十二〕）、『蠅』（同）で注目され、一九二四（大正十三）年『文芸時代』を創刊し、川端康成らと新感覚派の作家として活動する。『機械』（一九三〇〔昭和五〕）、『上海』（一九三二〔昭和七〕）、『旅愁』（一九四〇〔昭和十五〕）―一九四六〔昭和二一〕）など。

吉屋信子

一八九六（明治二九）―一九七三（昭和四八）

少女小説作家として人気を博した後、雑誌や新聞などで連載小説を発表し多くの読者に支持された。『女の友情』（一九三五〔昭和十〕）、『良人の貞操』（一九三七〔昭和十二〕）、『鬼火』（一九五二〔昭和二七〕）、『徳川の夫人たち』（一九六六〔昭和四一〕）、『女人平家』（一九七一〔昭和四六〕）など。

参考文献一覧（五十音順）

市古夏生・菅聡子編、浅井清編集協力『日本女性文学大事典』（日本図書センター、二〇〇六）

岩切信一郎『明治版画史』（吉川弘文館、二〇〇九）

岩淵宏子ほか編『少女小説事典』（東京堂出版、二〇一五）

大貫伸樹『装丁探索』（平凡社、二〇〇三）

小田光雄『近代出版史探索Ⅰ』（論創社、二〇一九）

二〇一九

小田光雄『近代出版史探索Ⅲ』（論創社、二〇二〇）

『梶井基次郎資料展図録』（大妻女子大学国文学会、二〇〇八）

小池智子「佐野繁次郎と横光利一についての覚書」『横光利一と川端康成展』（世田谷文学館、一九九九）

河野龍也『梶井基次郎「檸檬」のルーツ――

実践女子大学蔵「瀬山の話」』（武蔵野書院、二〇一九）

二〇一九

鈴木貞美『梶井基次郎の世界』（作品社、二〇〇一）

二〇〇一

鈴木貞美編『梶井基次郎全集』第一巻―第三巻、

別巻（筑摩書房、一九九九・二〇〇〇）

鈴木貞美編・解説『新潮日本文学アルバム 梶井

基次郎』（日本図書センター、一九九七）

鈴木貞美『年表作家読本 梶井基次郎』（河出書

房新社、一九九五）

竹田志保『吉屋信子研究』（翰林書房、二〇一八）

羽鳥徹哉・原善編『川端康成全作品研究事典』（勉

誠出版、一九九八）

宮内淳子「解題」『谷崎潤一郎全集』第十七巻（中

央公論新社、二〇一五）

山中剛史『谷崎潤一郎と書物』（秀明大学出版会、

二〇二〇）

淀野隆三・中谷孝雄編『梶井基次郎全集』上下巻（六

蜂書房、一九三四）

淀野隆三・中谷孝雄編『梶井基次郎全集』全三巻（筑

摩書房、一九五九）

淀野隆三・中谷孝雄編『梶井基次郎全集』全三巻（筑

摩書房、一九六六）